

令和 2 年 6 月 3 日現在

機関番号：14401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2019

課題番号：18H05579・19K20788

研究課題名（和文）西日本方言の敬語運用に関する言語地理学的研究

研究課題名（英文）Linguistic Geographical Study on Honorifics in Western Japanese Dialects

研究代表者

酒井 雅史（SAKAI, Masashi）

大阪大学・文学研究科・助教

研究者番号：20823777

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：徳島県徳島市、広島県広島市、岡山県岡山市の自然会話データを作成した。また、方言文法全国地図を用いた分析をもとに、九州方言の敬語運用および全国の敬語運用に関する分布を明らかにした。具体的には、全国分布については対者／第三者待遇場面で尊敬語形式を用いるかといった観点から、その分布は地理的連続性がありながらも周圈的な分布をなしているとは言えないことなどを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

方言形成論について議論が深まりを見せていく中で、敬語運用の分布を明らかにすることで、形式の分布から読み取れるこれまでの方言形成論に新たな知見をもたらし、当該分野の議論をより深化させることに寄与し得る。

研究成果の概要（英文）：I created natural conversation data for Tokushima City, Tokushima Prefecture, Hiroshima City, Hiroshima Prefecture, and Okayama City, Okayama Prefecture. Based on an analysis using a Grammar Atlas of Japanese dialects by NINJAL, the distribution of honorifics in the Kyushu dialect and nationwide was investigated. Specifically, regarding the nationwide distribution, from the perspective of whether to use the honorific forms in the situation of treatment with a address / third party, it is said that the distribution is geographically continuous but is also a peripheral distribution.

研究分野：方言学

キーワード：方言敬語 敬語運用 自然会話 ロールプレイ会話 言語地理学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

方言の敬語形式は、西日本ではナサルに由来する形式が分布し、地域によってその他の方言形式を用いるところがある一方で、東日本では首都圏と東北の一部を除いて敬語形式があまりないという分布になっている。すなわち、西日本方言は東日本方言に比べて複雑な敬語形式の体系を持っていることが知られている。一方、敬語形式の用い方(運用)の特徴については、加藤(1977)によって身内にも尊敬語を用いる「身内尊敬表現を持つ方言域」かどうかといった大まかな区画がなされている。

方言の敬語に関する研究は多くの蓄積があるが、上記のものも含め、これまでの先行研究では、敬語形式の地理的なバリエーションの様相と特徴的な運用が個別に指摘されてきているという問題があった。研究代表者はこれまで、実際の会話データを分析資料として方言の敬語運用に関する研究を進めてきた。その中で明らかとなった運用面の特徴を、日本語方言の敬語運用の中でどのように位置づけられるのかを考えることが次に必要となってくる。そして、他方言との位置づけを考える際には、統一的な手法によって集められた資料を細かく分析することによって実証的に説明する必要がある。これらの課題を解決すべく、臨地調査によって収集した会話データおよび既存資料の分析を通して、日本語方言の敬語運用に関する地理的分布を明らかにする必要があると考え、本課題に取り組んだ。

2. 研究の目的

本研究の目的は、西日本諸方言の敬語運用の地理的バリエーションを明らかにすることにある。具体的には以下の2点を目的として設定した。

(A) 個々の方言がどのような形式をもつのかと、それらの形式をどのように用いるのかといった運用には関連があるのか

(B) 方言の敬語運用の地理的分布の詳細はどのようにになっているのか。

(A) については、長浜市方言では複数の敬語形式を持っているためにそれらを流動的に用いるといった特徴が観察されたが、どのような形式を備えているのかと、どのようにそれらの形式を用いるのかといった形式と運用の間には関連性が認められるのかは、他方言を分析することで検討する必要がある。

また、(B) に関して、敬語形式の分布については同系統(ナサル系統)の敬語形式が京都を中心に同心円状に分布することが知られているが、運用面については先述の加藤(1977)で指摘されているような大まかな特徴しか知られていない。地理的に連続する他方言において、敬語形式と同様にその運用も伝播するのかを明らかにする必要がある。

3. 研究の方法

本研究では既存資料の分析と並行しながら、対象となる地域でフィールドワークを行い、分析のための会話データを収集した。そして、その会話データの分析をもとに、敬語運用の地理的な広がりを明らかにする(上述した研究目的のB)。方言の会話資料にはいくつかの既存資料もある。しかし、そこに収録されている会話内容は必ずしも統一されているわけではない。敬語運用を方言間で比較・対照しその分布を読み解いていくには、敬語形式の典型的な使用要因である目上/目下の人物などを設定したロールプレイ会話などを新たにフィールドに赴き、収集する必要がある。

調査地域は、敬語使用が活発である西日本のうち近畿地方、中国・四国地方を対象とする。具体的には地理的連続性と形式の分布から、長浜市方言、大津市方言、大阪市方言、京都市方言、和歌山市方言、神戸市方言、岡山市方言、広島市方言、徳島市方言、高知市方言を対象に調査する。敬語形式の体系が複雑であるとされている西日本では、ナサル系統の形式が分布しているが、その地理的連続性を考慮に入れたうえで、形式と運用の関連性を検討するため(上述した研究目的のA)、これらの範囲を対象地域に定め、データの収集を行った。

4. 研究成果

九州方言における敬語運用の型の分布を確認したうえで、甕島方言における敬語運用の型の分布が特異であることを述べた。また、敬語運用の型と用いる敬語形式の関連について、敬語運用の通時的変化を踏まえたうえで甕島方言を観察することで用いる敬語形式と敬語運用には積極的な関連がみられないのではないかということ結論として提示した。このことは、敬語運用をはじめ言語行動にあずかる言語現象については、形式の伝播はあっても運用は伝播しないことを示唆する。

また、尊敬語形式の全国的分布については周圏分布が認められることが知られているが、対者/第三者待遇場面で尊敬語形式を用いるかといった観点からの分布では、地理的連続性がありながらも周圏的な分布をなしているとは言えないと考えられることなどを報告した。

さらに、『方言文法全国地図』第6集所収の敬語関連のデータのうち、特定形(イラッシャルなどの敬語動詞)を有する動詞の結果データをもとに、一般形(ラレルなどの敬語助動詞)を用いるか特定形を用いるか、どの程度特定形を用いるかといった点から分析した。その結果、近畿から中国地方にかけては京都・兵庫・岡山・広島で、九州では福岡・佐賀・長崎・熊本・宮崎で特定形の使用がなく一般形を用いる地域が分布し、これらの地点ではいずれの回答においても方言一般形の使用が見られ、敬語使用が盛んな西日本においても特に一般形が日常的に使用さ

れる地域であることを明らかにした。一方、その他の西日本地域では、特定形が回答される傾向にある。ただしそこでの回答では、奈良・島根では標準語形の回答率が高いのに対して、その他の地域では、方言特定形による回答が多数を占めるといった違いがある。特に鹿児島ではすべての回答において方言特定形（オジャル・オサイジャスなど）が用いられるが、山口ではイラッシャル相当ではオイデルが用いられるが、食べる・言うでは一般形が用いられ、徳島・香川・高知ではイラッシャル相当はオイデルを用い、その他の項目では標準語特定形が用いられるといったようにさらに細分化される。以上の敬語運用に関する全国分布の結果からは、方言の活発度の異なりがうかがえるととも標準語の受容度の違いを示せる可能性があるのではないかと考えている。

本研究で得られた成果は、敬語運用の分布を把握するだけでなく、各地方言での標準語をはじめとする他変種との接触の際の受容度や受容の在り方の違いを明らかにすることにも資するのではないかと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 酒井雅史	4. 巻 31
2. 論文標題 関西方言における素材待遇形式の分布 読みがたり昔ばなし資料を手がかりに	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 阪大日本語研究	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 酒井雅史
2. 発表標題 九州方言における甑島方言の敬語運用
3. 学会等名 日本言語学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 酒井雅史
2. 発表標題 読みがたりむかし話資料にみる素材待遇形式 関西方言における分布と運用の特徴
3. 学会等名 日本語学会2018年度秋季大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----